Institute for Studies in Humanities and Cultures, Nagoya City University
名古屋市立大学　人間文化研究科
人間文化研究所
NEWS LETTER
No.19, July 2010
〒467-8501　愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑 1 番地　　Tel･Fax　052－872-3536
Mail: institute@hum.nagoya-cu.ac.jp　HP: http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute

新研究所長のご挨拶

新たな領域に向けて

2010 年度より山田明前所長の後任として、人間文化研究所長を拝命いたしました。5 年前の人間文化研究所設置以来、歴代の所長は、大学教員としても研究者としてもキャリア十分の重鎮の方々が務めてこられましたが、私はまだまだ若輩者でございます。この重責に堪えうるか不安もございますが、これまでの所員としての経験を踏まえ、研究所の充実のため努力いたしますので、どうぞよろしくご指導のほど、お願い申し上げます。

名古屋市立大学人間文化研究所は、人文社会学部・大学院人間文化研究科を基盤とし、教育・研究の充実と地域社会への貢献を目的に、この5年間、地道に活動を行って参りました。活動の柱には「人間・地域・共生」のキーワードを据え、学際的なプロジェクト研究の推進と、「年報」の発刊や一般市民向けの公開シンポジウム、「サイエンス・カフェ」「マンデーサロン」などの開催による研究成果の発信に努めて参りました。

これらの実績により、人間文化研究所の存在感は徐々に高まってきたと自認しておりますが、今後は、なおいっそうの発信力の向上と、地域社会への貢献とが求められると思っております。そのために、教職員および大学院生が一丸となって研究を推進できる環境作りと、学部学生をも巻き込んだ地域社会への参与など、新たな領域の開拓を検討したいと考えておりますが、その一つとして、2010年度は名古屋市博物館との連携を積極的に推進してゆきます。

こうした検討内容を具現化することにより、地域社会・市民と大学をつなぐ「知」の発信拠点として、また、学内外の研究者の交流の場として、研究所をますます充実させたいと考えております。どうか、人間文化研究所を引き続きご支援くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

2010 年 4 月 1 日
名古屋市立大学人間文化研究所長
阪井　芳貴

人間文化研究所年報　第 5 号刊行

特集:「持続可能な社会」
第１部　人間文化研究所「5 周年記念シンポジウム」
第２部「持続可能な社会」とESD

2010 年度 研究プロジェクト

代表者:有賀克明教授
「地域に根ざす次世代育成支援としての〈学-学-社連携〉」
代表者:土屋勝彦教授
「世界文学における混成的表現形式の研究」
代表者:山田　明教授
「名古屋の「観光まちづくり」に関する人文社会科学分野からの学際的研究」
代表者:石川洋明教授
「18 才のハロー・ファミリー:次世代育成支援のための基礎的研究」

Human & Social サイエンス・カフェ

第 33 回　サイエンス・カフェ　3 月 21 日(日)

テーマ:「ウチナーVS ヤマト」
講　師:　阪井　芳貴教授

現在、連日沖縄報道がなされている。もちろん普天間基地移設問題だ。政治や「沖縄」について知識のない者でもテレビや新聞から基地のゆくえが気にならざるを得ない状況の今日、沖縄県美ら島沖縄大使でもある阪井芳貴教授から「ウチナーVS ヤマト」の題目で講義が行われた。

まず、日本においてトップであるかワーストであるかというポジションにある沖縄の説明がされた。平成 18 年から 20 年における主要指標調査の概説で沖縄の外郭が理解できたところで、次に沖縄の歴史に移った。この歴史説明は単なる沖縄の時の推移ではなく、ウチナーからみた日本、ヤマトからみた沖縄の視点からの歴史が語られ、外からくるものを受け入れながらも自分のものに変容して受け入れて来た歴史に沖縄のあたりのよいやさしさの奥にある、したたかさ、強さを感じた。歴史を語りながら「集団自決」をめぐる教科書検

定問題、米軍基地の過重負担、江戸時代に 18 回も行われた江戸上り、それにより琉球側と幕府側の異文化体験といった政治、経済、文化にまで多岐にわたる内容であった。

また、4 月 25 日に沖縄県民大会が開催されることにも言及された。沖縄の人たちは県外、国外移設を求めている。しかし、政府はシュワブ陸上部とホワイトビーチ沖の 2 案を提示方針とし、首相は沖縄県外移設の断念を示唆したされている現在、私たちはどうしたらよいのか考えさせられる。3 月下旬春分の日であったが、午前は黄砂に覆われ、午後は強い風が吹いた寒い天候のなか、19 名の方が参加された。終了後、帰路、栄の繁華街を歩きながら、まわりの若者にとって沖縄はどんな存在なのだろうか、今後基地問題はどのような結果に至るのか思い巡らされる講演内容であった。

水野 美津子（同研究科博士前期課程）

第 34 回 サイエンス・カフェ 4 月 18 日(日)

テーマ:「アメリカ文学とボーダーランド」
講 師: 田中 敬子教授

今回は田中敬子先生が、メキシコ系アメリカ作家の作品が歴史の中でどのように登場し、どのような意味のある作品であったかを講義された。 ボーダーランドとは国境地帯で、広義には異文化が混在する地帯を意味する。グロリア・アンサルドゥーアの『ボーダーランド』というタイトルの本は狭義にはアメリカとメキシコのボーダーを主として意味している。 しかし、古典的アメリカ文学におけるボーダーランドとは、文明と自然の境界としてとらえられている。19 世紀においても同様なとらえ方で作品が書かれたが、自然への傾斜が見られる。異文化とのボーダーランドをアメリカが強く意識するようになったのは、20 世紀後半といえる。

さて、1821 年のメキシコ独立や 1836 年のテキサス独立などの歴史を背負ったメキシコ系アメリカ作家は自分たちのアイデンティティを表す呼称を用いて「チカーノ・チカーナ文学」を生み出した。アンサルドゥーアの『ボーダーランド』(1987)はチカーナ（女性作家）文学の一作品であり、国・性別・言語などのボーダーに生きるメキシコ系アメリカ人のアイデンティティをテーマにした。 さらに、同時代のメキシコ系アメリカ人ではない白人作家がメキシコ国境を描いた作品をとりあげ、彼らにとって、アメリカとメキシコのボーダーとは異なるボーダーが存在するのではないかと結んだ。

一般的にはあまり知られていないメキシコ系アメリカ作家の作品のあらすじをわかりやすくお話いただき、文学の世界を味わうことができた。

伊藤 泰子（同研究科博士後期課程）

第 35 回 サイエンス・カフェ 5 月 16 日(日)

テーマ: 「文学の中の丸善」
講 師: 谷口 幸代准教授

「記憶の中の丸善」

谷口先生のお話をうかがいながら、子どもの頃からあこがれていた丸善が明治時代から文学者のみならず知識人にとって、舶来文化との重要な接点だったことを再認識しました。そして東京日本橋の本店や名古屋店の正面玄関を入ると突きあたりに左右に分かれて階上へ進む階段のある風景や、早く丸善で洋書が買えるようになりたいと思って青年期を過ごしたことを懐かしく思い出していました。それが、私たちの世代の大人への通過儀礼であったと思います。

谷口先生とはかなりの期間同僚であったのに、私は先生の講演を聴くのは今回が 2 回目でした。周到に準備された講義内容と資料、誠実なお人柄が伝わる朗読など、とても感銘を受けました。 あっという間に予定の時間が過ぎ、五月晴れにふさわしいさわやかな気持ちで帰途につきました。次回は、科学者からみた丸善を聴いてみたいと思います。

後藤 宗理(椙山女学園大学教授)

第 36 回 サイエンス・カフェ 6 月 20 日(日)

テーマ: 「注意の初期発達:"いたいの、いたいの飛んで行け"の真実」
講 師: 中川敦子教授

梅雨らしく、激しい雨が降る中で今回のサイエンス・カフェは開催されました。そうした足元が悪い中にも関わらず、予想を上回る方々が講義にいらっしゃいました。

中川先生より、今回の論題である、なぜ「いたいの、いたいの飛んでいけ～」の言葉掛けで子どもの「痛み」が緩和されるのか？を分かりやすく解説してもらえました。普段何気なくおこなっているこうした行為も、「痛みの発信源である対象から、他のもの（対象）へ注意をそらす」と考えることでひとつの学問として捉えることができました。また、子どもの「注意」という機能がどのように発達し、脳のどの部分が関与するのかなど、神経心理学をご専門にされている先生らしく、詳しくも分かりやすく教えてもらえました。

また、注意機能の初期発達を豊富な実験経験を交えてお話してくださり、実験という特殊な状況を想像しにくい聴衆からも活発に質問が上がりました。みなさん、子どもの発達に関して並々ならぬ関心を抱いていらっしゃることが伺え、有意義な時間を過ごされたようでした。終了後は雨も上がり、みなさん満足気な表情

で雨上がりの栄へと消えていきました。

木村 由佳(同学部卒業生)

マンデーサロン

マンデーサロン 3 月 15 日(月)

テーマ:
「地域における芸術教育の可能性ー小学校からの実践報告」
講 師: 梶田 美香(同研究科博士後期課程)

本学大学院博士後期課程の梶田美香さんを講師に開催された。前半は、梶田さんが小学校で実践しているプログラムに沿って進められた。初めのグランドピアノの生演奏を聴きながら、音楽教室というこじんまりした空間であったせいか、「音」は物体の振動が空気の振動として伝わることを改めて実感していた。iPod やケータイで音楽を聴くのでは味わえないであろう、空気の振動を皮膚で感じるような一次的経験が子どもの発達過程において重要である、という講師のメッセージが込められているようにも感じた。続くヤマハミュージック東海の佐橋さんの「チェンバロは叩くのではなく引掻いて音を出す」「グランドピアノはレペティションレバー機構によって鍵盤が素早く戻る」などのピアノの仕組みに関する話も、とても興味深いものであった。さらに、演奏された曲のイメージから題名をつけてみたり、グランドピアノの周りでハンマーが弦をたたく様を目の前で見たり、受動的のみにならないよう工夫されていたが、子どもたちとは異なり、目の輝きや反応がやや鈍っている聴衆を前にお二方ともやりにくかったのではないかと思う。

後半はパワーポイントによる報告で、音楽など芸術の専門家が、外に出かけて行って芸術普及活動を行う「アウトリーチ」について説明がなされた。梶田さんは、このアウトリーチを小学校で実施するにあたり、「総合的学習」における一過性的な活動にとどめるのではなく、音楽科教育の中に位置づけようと、意欲的に取り組まれている。特に「鑑賞」だけではなく「創作」すなわち曲作りまで行うことで、子どもたちの音楽に対する意識が大きく変化したであろうことが推察できる。おそらく今後は実践による効果をどのように客観性をもって評価するか、について検討されていくことと思い、研究の発展に期待している。

野中 壽子(同研究科教授)

マンデーサロン 4 月 19 日(月)

テーマ:「「ひめゆり 平和への祈り」展に寄せて」
講 師: 安藤 さおり(かわら美術館学芸員)
司 会: 阪井 芳貴(人間文化研究所長)

阪井先生の司会により、「ひめゆり平和への祈り」展について、高浜市のかわら美術館学芸員の安藤さん、そしてそのバックアップをされた朝日新聞社の小倉さんからお話をうかがった。その内容はひめゆり学徒隊のみならず、戦争全般、それを後世に伝えることの問題についての話までにおよび、幅広く濃い内容であった。安藤さんが言われていた中でも私が強く心に残ったことは、「戦争を分かったつもりになっていないか」ということであった。原爆資料館や特攻隊平和記念館など、昔私は訪れた時に涙があふれ、大変なショックを受けたことを思い出した。そして思った、「こんなことはやってはいけない」と。しかし、その衝撃ですら私は戦争の悲惨さのごく一部を垣間見たにすぎないのではないかと感じた。現実では、もっと残酷なのだ。戦争とは体験者にしか分からない、想像を逸脱した恐ろしさをもっていることが分かり、とても考えさせられた。

また、そのような想像を絶する戦争の体験を体験者が語るのは非常に難しいという。それらの体験をふまえ、平和についての大切さを語るのは簡単ではないという。また、平和を伝えようとしても、正しく伝えることは難しい。広報の誤った解釈もある。さらに、当の沖縄の戦争を知らない世代も、沖縄の歴史や文化などを知らないこともあげられる。

私は茶華道の先生が戦争のことについて語られた後に、ふと何かを思い出すようにもらされた言葉が忘れられない。「戦争のことは、話し出したら切りがないけどね・・・。」どのような想いを背負って、先生は私の前でそのようなことを言われたのだろうか。戦争の悲惨さを語り、平和についての大切さを伝えることは、戦争の体験者をどれほどの心にさせてしまうのか。きっと私には、はかり知れない重みをもっているのだ。「戦争の愚かさを説き、平和の大切さを後世に伝えなければならない。」と、よく言われることだが、それすらも戦争の経験者にとっては、今尚、残酷であるのだ。私たちはあまりにもそれを知らないのではないかと感じた。

さらに、平和を伝える場所を探すことにも苦労したという。今回は、関東の大都市では行われない。何故なら、その場所を受け入れてくれるところはなかったからだ。実は、打診した所はほとんど断られてしまったという。また、かわら美術館でも入場者はほとんど年配の

方々であり、戦争を知らない世代はなかなか来場しないという。つまり、平和の大切さや戦争の恐ろしさを伝えたい次世代の入場者が少ないということだ。そのためかわら美術館では、教育委員会を動かして積極的に次世代にそれを伝える働きかけをしている。平和を伝えることとは、その背景を整えることも難しいと痛感させられた。

最後に、ひめゆり学徒隊の生き残りの方々には子供がいると配布資料を見て分かった。いわゆる「戦争の落とし子」と言われる方々である。そして、その子孫が今も続いているだろう。ひめゆり学徒隊はその過半数の方々がその尊い命を奪われている。生き残った方々も、紙一重にその中に入っていたかもしれないのだ。生き残った方々の命の血脈が今に息づいているが、もし戦争などなく、亡くなった方々が生きていたら、どのような命が現在に続いていたのかを考えずにいられない。実は、私の亡くなった祖父も、空襲時に実家に帰っていて、たまたま生き残れたうちの一人であった。たった1日の差である。私は戦争で、1日の差によっては生まれない命であったのかもしれない。

伊澤　志奈（同研究科博士前期課程）

マンデーサロン　5月17日(月)

テーマ：「日本のシェイクスピア上演」
講　師：　小林　かおり教授

5月17日、新年度第2回のマンデーサロンがおこなわれました。小林かおり先生に、着任早々のお忙しい時期にもかかわらず、約70分にわたって、「日本のシェイクスピア上演」というタイトルでお話して頂きました。

日本におけるシェイクスピア上演史の検討という課題は、『ハムレット』の「芝居は自然を映し出す鏡」という言葉に従いながら、シェイクスピアの上演のされ方が、日英の関係性もしくは日本社会の変化を映し出す鏡であるという見地から設定されました。具体的には、日本のシェイクスピア上演の歴史が3つの時期にわけられ、「近代化＝西洋化の時代」には西洋の模倣、「日本経済の発展の時代」にはオリエンタリズムの体現と解釈される日本独自の価値観の強調、「ポスト・バブル時代」には西洋の視線からの解放と、アジア諸国との競演や多様な方向性の出現という特徴が指摘されました。

小林先生のお話には画像や映像が多く用いられ、特に現在進行中のシェイクスピアのアジアでの上演のアーカイブ化プロジェクトは、十分なインパクトを聴衆に与えました。またお話しの内容は、参加者のそれぞれの立ち位置にそった多様な関心を惹起する刺激的なもので、質疑も文学的な関心から経営思想との比較対照まで多岐にわたり、予定の時間をややオーバーする活発な議論となりました。

安藤　究(同研究科准教授)

◇ 今後の研究所主催行事の予定

Human & Social サイエンス・カフェ

・7月18日(日)　伊藤　恭彦教授
「税制改革の政治学－公正な社会のための税を考える」
・8月22日(日)　山田　明教授
「COP10と名古屋の観光まちづくり」
・9月19日(日)　久保田　健市准教授
「青年の自立と家庭・地域の教育力」

マンデーサロン

・7月19日(月)　名古屋市博物館　学芸員
「特別展　ポンペイ展　世界遺産　古代ローマ文明の奇跡」
・9月27日(月)　名古屋市博物館　学芸員
「開府400年記念特別展　変革の時　桃山」

トーキング・カフェ

院生が集まるトーキング・カフェは、月に一度研究所にて開催しています。トピックは、「私はこうやって修論を書きました！」です。これから書く人、書いた人、いろいろな人の情報をお待ちしています。

重原　敦子(同研究所特別研究員)

◇「市民学びの会」第4回総会・記念講演

4月17日(土)に大西　聡氏（名古屋市副市長）が「民間から市役所へ入って思うこと」という演題でお話をされました。

編集後記

今号のニュースレターに後藤宗理先生から過分なお言葉を頂戴致しましたが、5月のサイエンス・カフェを担当致しました。参加された方々の丸善や書籍に対する思いにふれ、大変楽しいひとときとなりました。また、地域と大学とをつなぐ本研究所に高い期待が寄せられていることも改めて実感致しました。

微力ではございますが、阪井所長と安藤先生とともに、研究所の一層の発展に精一杯努める所存です。あたたかいご支援を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。　（谷口　幸代）